

絵具に問う

2020 年度活動報告

保存修復専攻における絵画作品の調査では画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、これらを公開する仕組みはなく、専攻でデータをアーカイブする体制が整っていない状況があった。そこで本プロジェクトでは、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指す。

初年度の 2019 年度は、専攻の教員や学生が行った調査を専攻で把握し、教員や学生が調査データを専攻に提出する仕組みを構築することを目標とし、芸術資料館所蔵作品および専攻の授業である修復実習で調査をした作品については調査申請書・報告書・データの提出によって専攻が調査の実施を把握し、これらを保管することによってデータと共に調査の記録を残すことにした。この方針に沿って 2019 年 12 月に専攻の教員・学生にこれまでの調査の報告書とデータの提出への協力を依頼し、データを収集した。

2 年目の 2020 年度は、客員研究員の紀芝蓮氏が 2019 年度までに実施した芸術資料館所蔵の明治 30 年代から 40 年代にかけての卒業作品 76 点、2020 年度の修復実習において調査をした作品 4 点などのデータを収集した。2020 年度の作品調査については、調査の目的・対象・方法などを記入する申請書の様式を作成し、調査者は調査前に記入して教務補助員に提出するよう学生に周知した。申請書の様式は、従前から調査で使用している記録用紙や昨年度に作成した報告書の様式と共に、本年度から保存修復専攻で運用を始めた Google Classroom において資料として配布することで利便性を図った。収集されたデータについては、各種写真の撮影条件・蛍光 X 線分光分析の測定条件および測定箇所の記録とデータに齟齬がないかを川下理恵氏が精査した。これらの作業を通して明らかになった課題について川下氏を中心に明らかにした。これを踏まえ、より効率的な運用となるように改善を図る予定である。

高林弘実（美術学部准教授）